新潮文庫

帰　郷

大佛次郎著

新潮社

帰郷

定価140円

新潮文庫 草83 A

昭和二十七年十月三十日発行
昭和四十二年七月三十日二十八刷改版
昭和四十三年十一月十五日三十刷

著者 大佛次郎
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京二六〇局一一一一(大代)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊐ 印刷・光邦印刷株式会社 製本・大進堂製本所

© Jirô Osaragi 1952 Printed in Japan

新潮文庫

帰　郷

大佛次郎著

新潮社版

目次

孔雀 …… 七

無名氏 …… 一八

触手 …… 三四

朝 …… 四七

異邦人 …… 五九

夜の鳥 …… 八三

再会 …… 一〇七

花 …… 一二六

遅日 …… 一四〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ダイヤモンド……一六四
牡丹の家……一九〇
群動……二一三
過去……二四一
林泉図……二六〇
風土……二八二
霧夜……三一四
客……三四〇
解説　山本健吉

帰郷

孔雀

「如何です」
と、画家は連れを返り見た。
「なかなか景色の好いところでしょう」
一時間ばかり前に、強いスコールが過ぎて行った後で、くすんだ赤瓦に白壁の多いマラッカの町は、繁る熱帯の樹々とともに、洗い出されたように目に鮮やかな色彩を一面に燃え立たせていた。雨雲の一部が裂けて、凄じいばかりの日光が降りそそいでいる。町を縁取っている海は、まだ黒雲の下にあって、泥絵具で描いたように光のない灰色をしていたが、これもやがて晴れて来るので、見ている間に、青みをさして変化して来る。その青い色が、まだ極めて沈鬱な調子のもので、遠景に長く突出している椰子の林ばかりの黒い岬とともに、光の氾濫した町を一層絢爛としたものに見せているのだった。刻々と、その光は動いて、海の上にはみ出して行こうとする。
「丁度いい時、来たんですなあ」
と、画家は向きを変えて、ゆるい坂道を前面に在る昔のキリスト教の寺院が廃墟となって、四方の壁だけ大きく立っているのを見上げながら歩き出した。
丘の斜面の芝原で柄の長い鎌をふるって草を刈っていたマレー人が、二人を見て高野左衛子の

日本の着物の姿に驚いたように手をやすめて突立って見ていた。日本人が出会って見ても、この南方では、はっとして眺めるほど、純粋の日本の夏姿であった。いや、昔の東京の町なかでもホテルのロビーにいる時か、歌舞伎の廊下でも歩く時でないと、芸者でない限り、これまでに、大胆に人目を惹く身なりを、しかもきりっとした感じに着こなす女は見られない。

　高野左衛子は、内地の生活では洋装一点張りだったのが、シンガポールへ来るようにきまると、普通ならば和服に慣れた者も洋装に変えるところを、逆に、日本の夏の着物や帯を揃えて持って来た女で、落着いた好みに、どこの令夫人かと町で人を驚かすかと思うと、思い切って派手な白縮緬の染浴衣で、平気で自宅で客の前に出ていた。

「驚いていますよ」

「え？」

「いや、あのマレー人の先生が、あなたを見て吃驚しているというんですよ」

　過去にただの磨き方でない時期があったと知れる。白い顔の皮膚がしっとりと輝くようなのが、笑って、

「お化けだと思うんでしょうか」

「いや、きれいなものは、風俗の違う国へ行っても、きれいに見えることは、間違いない」

「小野崎さんは、お口がお上手ですから」

「いや、そうじゃない」

　ブンガ・チナの大きな木が一面に大輪の白い花を付け、雨後のせいで強く匂っているのを見上げていた。

　その花の匂いだけでなく、どの木も草も匂っている。土も匂っている。寺の廃墟の内部に入ると、屋根はなく、筒抜けの青天井で、四方の壁の隙間にも、小さい木が枝を伸ばして髯を生やしたように繁っていた。毀れた窓からは青い海が覗いている。

「あら、空っぽ？」

「ポルトガル人が建てたのが、和蘭陀人が攻めて来た時毀してしまったんですね、古いものなんです。千六百何年っていうから、ざっと三世紀昔のものだ」

　何もない内陣の石の床に、羅典文を彫刻した平たい大きな墓石が寝かせてあるのが、織田信長の時代に日本に切支丹の布教に来たフランシスコ・ザビエルの遺骸が、この下に一時埋っていた位置を記念するものである。その他にも幾つかの同じ形の墓標が、船の画や、紋章らしいものや文字を彫刻して残っているが、昔あった位置もわからなくなっているらしく、壁に立てかけて並べてある。頭蓋骨に、骨を二本組合せて、墓には不似合いに感じられる絵もあった。

　しかし、これは左衛子には、あまり興味のないことらしく、あたりを見回していた。外陣の床も草で一面である。小鳥が外の木の繁みに隠れて啼いているだけだ。

「これだけです」

「でも、いいところね」

「いつか来た時は、朝だったせいか、蝙蝠が幾つも飛んでいましたっけ」

　歴史という考え方が、画家の頭に泛んだ。

「最初に、ここに土人の王朝があって、そこへポルトガル人が攻め込んで来て城を作ったのを、和蘭陀人が来て占領し、その後で英国が手を入れたんですね。それから今度は、日本人が来て……

此为试读,需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この後は、また、どこの国が来るんでしょうかね。黒子のように小さい土地だけれど」
「外の景色がいいわ。小野崎さん、どこか写生をなさるの」
「あなたに待って頂くのは、お気の毒ですから」
「いいんです。あたし、アブドラに運転させて、町の方を見て、いい時分にお迎えにまいりますわ」
「それァ有難いんですが、買物をなさるにしても、もう町には何も残っていないでしょうよ」
「女だけで危険なことは御座いますまいね」
「いいえ、もう静かな、人気のいい町ですから。僕なんか、のんきに、ひとりでどこへでも入って行きますよ。やはり歴史のある古い町ですから、シンガポール辺りの人間ばかりうようよしていて人気の悪い新開地と違うし、とにかく小さいんです。自動車でしたら、往来にいる誰かを探そうとなさったら、二十分も走らせたら必ず、どこかで見つかるでしょう。そんなに狭い……」
運転手は、芝刈りのマレー人のところへ行って、ふたりとも悠長に芝に腰をおろして話し込んでいた。
「ドラ！」
と、名前のアブドラをちぢめて澄んだ声で左衛子が呼ぶと、小腰をかがめて敏捷に、自動車のところに戻って来た。やがて自動車はエナメル塗の背を光らせながら、ゆるやかに坂を降りて行き、青い樹立の陰に姿を隠した。
「買出しだな」

画家は、こう思うのだ。高野左衛子はそういう女なのである。椰子の林が、黒い花火を連発したような形で海を縁取っているデュフィ好みのマラッカの明るい風景や、三世紀も昔に日本にも来た耶蘇の坊さまの墓などには興味はない。もっと、彼女は、現世的な本能を働かしている。

どういう由縁があって、左衛子が海軍の特別の庇護を受け、三十そこそこの若さでシンガポールに来て、高級な料亭を開いているのかは画家はまだ知らずにいるが、静かで貴族的な容貌に、目立って実際的な欲望が組み合わさっていると知っても、別に驚かないのだった。

画家は、拳闘家のような巨きな肩をして見かけは堂々としているが、もう五十に手がとどいていて、髪など白い方が多く、青年ばかりの従軍作家の中では変り者扱いにされていたが、その代り、安っぽく驚いたり腹を立てたりするような性質はなくなっている。

ほんとうをいえば、この小野崎公平は、自分を画家だとは思っていない。若い時代に画家として勢い込んで仏蘭西に勉強に行ったのだが、巴里に着いて美術館を回っている間に、最初の一カ月で画を描くのを断念してしまったという男であった。もともと画家としては頭の冴えた方の男だったし、古今の大画家の作品の前に立って、自分の才能の限度が見えてしまって、勉強しても無駄だと思い込んだのである。それからは、段々と身を持ち崩して、ほん引同様の留学生相手のガイドから寄席の楽屋番までして、日本に帰っても画を出さずに、美術批評をしたり、画商の真似をしたり、新劇の舞台裏で働いていた。そこへこの戦争で、内地にいては食えないと見ると、急に画家に戻って運動して軍属となって従軍した。巴里でやっていたように、もぐりの生活法であった。お座なりのスケッチで、画に素人の軍人をだますのは易しかった。ところが、他にする

ことが何もなかったという事情もあろうが、南方にいる間に、ほんとうに自分で画を描きたくなっているのを知って、自分が先ず驚いたものだった。熱情が復活して来たのは、幸福であった。命令次第で危険な前線近くまで出ることもあるので、暢気(のんき)だが、どこかに死の影を予覚して、生きている間に何かしたいと思うようになったのかも知れぬ。

このマラッカの町は以前に訪ねた時から気に入っていた。色が複雑だし、静かな環境で、それも、過ぎた歴史の影が、土にも木にも滲(し)み込んでいるような気配が、文学書なども読むのが好きだった彼に、暫くでも戦争を忘れさせてくれるのだった。

画家が丘の樹立の間を歩き回って、漸く場所を決めて絵具箱をひらいた時分に、高野左衛子は町に在る印度人の貴金属商の店を見つけてアブドラに自動車を停めさせていた。表通りだが狭く汚い町で、その店だって小さくて、唯一の硝子棚の中には耳飾りの類を貧しく陳列してあるだけで、はだかの土間には、印度人が嚙(か)んで吐き出す檳榔(びんろう)の実の唾(つば)が、血のように散らばっていて、足を入れるのが気味が悪かった。

麻の服を着て、鬚(ひげ)のたくましい印度人が、椅子から立ち上って、左衛子を迎えた。

「ダイヤモンド、ない？」

自由なマライ語であった。

印度人は、ターバンにつつんだ頭を、横に振った。

「御座いません」

左衛子は、独得の鉛色の顔に白眼が際立っている相手の笑い方に、隠れているものを読み取っ

ていた。

「心配ないのよ。蔵ってあるんでしょう」

「ルビーだけ」

「じゃァ、お見せなさい」

真昼の外の光が強烈だから、店の中は薄暗いが、自動車を走らせて風を受けて来た者には蒸暑かった。左衛子は、日本の扇を帯から抜き取りながら、往来の方を見た。日本人は絶対に通らなかった。マライ女か華僑の男が歩いて過ぎるだけで、筋向うの店は空家のように埃によごれて戸が閉っているのは、何の店か、もう売るだけの商品を失くしたものに違いなかった。その屋根の上に、同じ塔を二つ並べた教会らしい建物が伸び上っていた。暗緑色に塗って、青い立木とともに、乾いて侘しい風景である。左衛子は知らないが、ザビエルを記念した寺院であった。ルビーを数種類見て、黙って、その一つを言値で買い、軍票で支払いながら、

「ダイヤ、あるんでしょう」

ルビーは、そう追及する前提として買取ったものであった。果して印度人の態度は変化して来ていた。

「ダイヤモンドは、日本軍が命令で買って行ったから、なくなりました」

「でも、一つや二つは、残っているでしょう。シンガポールでも華僑の店に行けば、ちゃんと奥から出して来て見せてくれるのよ」

「あっても高いです」

「お見せ」

たくましく傲慢に見えた鬚面は、遂に、譲歩の色を見せた。三カラットばかりの大きさのダイヤモンドは、左衛子の華奢な指に捕えられて、皮膚にプリズムの光を散らした。

「もっと大きいのが欲しいわね」

乞食が左衛子を見つけて、店頭に立った。これ以上は瘠せられないというくらいに肋骨がむき出して、足の脛など、杖のように細い印度人であった。それと見ると運転手のアブドラが口ぎたなく叱りつけてから、かねて主人に言いつけられているとおり、自分が小銭を出して、追い払うのだった。

確かにマラッカは小ぢんまりした町であった。さかり場の広い通りは、五分も自動車で走ると、カンポン（郊外）の風景となって、人家がとぎれ椰子の林や畑が現れて来る。床の高いマライ人の住家が見つかったら、忽ちに町は終るのだ。

「チャイナ・タウン」

と、左衛子は、運転台のアブドラにいいつけた。富も物資も南方では英国人が立ち去った後は華僑が一手に収めているからだ。

人家の間を流れるマラッカ川は、掘割のように水が濁っていて動かない。華僑の町は、そこの橋を渡ってから、海岸に沿って長く続いている。それも商店街となっているのは、橋の付近だけで、その奥は、シンガポールあたりの富裕な人たちの、隠宅や、大住宅が軒を並べていて、白昼も門の扉を固く閉ざして人通りも稀な閑静な屋敷町が続くのである。建て方は、どれも同じ様子で、瓦屋根に反りを打たせ、壁が白い表構えに、板の厚い塗戸を左右から閉ざした門の真上には、

漆塗りの大きな文字の額を掲げて、

天官賜福

五福臨門

といった風の文字を彫って朱や碧(あお)を塗った聯(れん)を掛けてある。客が外に立って案内を乞わない限り門をあけないので、内部に住む人の声も往来に漏れず、この炎熱の白昼に、この町の生活はまるで密封されたようにひっそりとしているのだ。左衛子のような外来者から見れば、空家ばかりの街を見るような工合で、ただ自動車を一直線に走らせるだけのことである。

印度人の店で、左衛子が買入れたダイヤモンドは三顆(か)であった。まだ他にも同じような店がありそうに思って窓から探しているのだが、城のような家ばかりが隙間もなく並んでいる閑静な町の外観は、失望に値した。マラッカは金持ちが隠居する町だと聞いたので、宝石商は多いものと期待して来たのだった。

「帰りましょう」

左衛子は、丘の上で画を描いている画家のことを思い出した。

自動車を返して、さっきの橋の付近まで来ると、前方の通路の中央に自動車が停っているのが見えた。自動車は殆ど全部徴発して、軍の日本側の主な機関が使用していたことで、左衛子は近寄りながら、その車の乗手に注意した。高級車のキャディラックの新式のものだった。

これがパンクしていたので、タイヤを取換えるので、人は降りて道端の樹の陰に立っていた。防暑服の若い海軍士官に、ヘルメット帽をかぶった背広の中年の紳士である。先方からもこちらの自動車を注意して見まもって待っていた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com